



博物館だより

Nagano City Museum
第129号

令和6年度春季企画展

「青い目の人形」 記憶から何かへー戦後80年を目前に



写真1 Madame Hendren Doll (当館蔵)

日米親善人形ではないかと推察された人形。この人形の来歴を直接的に示す史料がないため、人形が昭和2年のものと断定することはできていない。

長野市立博物館では、令和6（2024）年4月27日～6月16日に、日米親善人形にかかわる展示を行います。

長野市立博物館では、令和4（2022）年に、個人の方から人形をご寄贈いただきました（写真1）。この人形は、その形態から Madame Hendren Doll と見られます。昭和2（1927）年に日本へ贈られた日米親善人形（通称「青い目の人形」）には、Madame Hendren Doll が多くありました。また、御寄贈者の親族に小学校の教員をしていた方がいたため、これが昭和2年の日米親善人形なのではないかと考えられました。しかし、昭和2年から100年近く経ち、戦後80年を目前とした現在においては、これが昭和2年に贈られた日米親善人形かどうか分かる人はいなくなっていました。そのため、史料を探すことになりました。ここでは、この人形の存在を入口に、昭和2年の日米親善人形について見ていきたいと思います。

1 海のあちらの友だち 日米親善人形

昭和2年に、アメリカの世界児童親善会の企画で、アメリカの各家庭で用意された人形が日本の子どもたちに贈られました。この時に贈られた人形は、Friend-ship Doll（友情人形）と呼ばれました。ここでは、日米親善人形と呼びます。

当時、アメリカでは日本人移民排斥運動が起こっていました。それに日本側も反発し、日米の関係が悪化していました。その状況を子どもたちの交流によって改善しようと、アメリカの子どもたちから日本の子どもたちに人形が贈られ、小学校や幼稚園に配られたのです。「海のあちらの友だちの」という歌い出しで始まる歌も作られ、人形は盛大に歓迎されました。その返礼として、日本からも答礼人形が用意され、アメリカに贈られました（写真2）。



写真2 日本国際児童親善会4 答礼人形送別会 日本青年会館（昭和2年11月4日）
（渋沢史料館蔵）

この事業は、宣教師として日本の大学で教鞭をとった経験を持つシドニー・ルイス・ギューリック（1860-1945）が提案し、渋沢栄一（1840-1931）が仲介して行われました。シドニー・ルイス・ギューリックは、子どもたち同士の個人的な交流を目指していました。その一方で、日本では官による受入れをしたために、双方の意図にズレがあったことなどが指摘されています〔是澤 2010〕。また、人形を贈呈して国際交流を図ることは、この昭和2年の事業以外にも行われていました〔ベレジコワ 2021〕が、日本では昭和2年の事業が特に注目されています。それは、日本で大々的に人形が迎えられたことと、人形がたどったその後の歴史が、戦後注目されたことによると考えられます。

2 「青い目の人形」

昭和2年に贈られた人形は、「青い目の人形」と呼ばれて親しまれました。実際に目が青かった人形はほとんどありませんでしたが、日本では童謡「青い眼の人形」が既に流行していたこともあり、新聞や雑誌では日米親善人形を「青い目の人形」として紹介していました⁽¹⁾。この童謡に「青い眼をしたお人形はアメリカ生まれのセルロイド」という歌詞があるため、日米親善人形は「青い目」で「セルロイド」であると思い込まれてしまったとされます〔是澤 2010〕。日米親善人形はセルロイド製でもありませんでしたが、アメリカ製ということで童謡のイメージと結びついてしまったのです。大正時代にはセルロイドのアメリカ

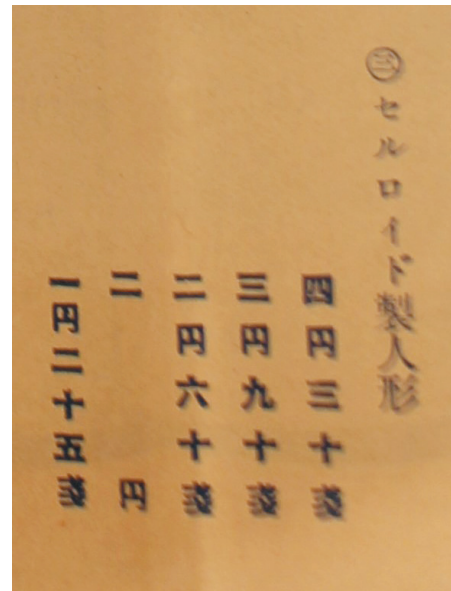
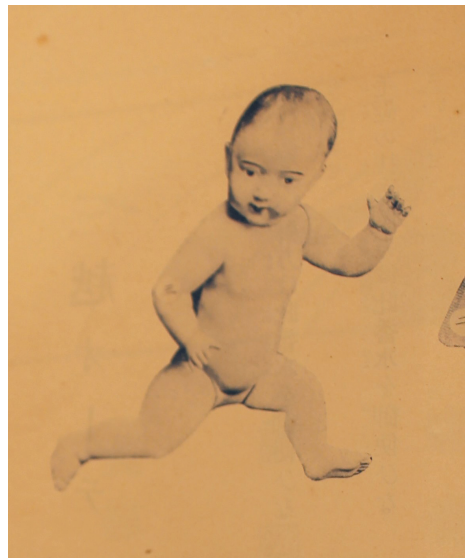


写真3 セルロイド製人形「三越 大正六年九月號」より
(吉徳資料室蔵)

力製人形が売られていたこともあり（写真3）、そうしたイメージが定着してしまったと考えられます。

大正時代には富裕層の間で西洋人形や西洋モチーフの商品が受容されていました。三越のカタログを見ると、アメリカ製の人形を含めた西洋人形が掲載されています。三越は、地方の豪商・豪農が贈答品などのよい品を注文する際に利用していた百貨店

です。三越などでは西洋人形は正月やクリスマスなどの贈答品として販売されており、大正時代～昭和時代初期には裕福な家庭で購入することができるものだったといえます。当時、日米親善人形だけでなく、様々な西洋人形が商品として流通し、そこに「青い目」の姿が描かれていたのです(写真4)。



写真4 三越カタログに描かれる「青い目」の姿
(吉徳資料室蔵)

また、日米親善人形は、日本では雛祭りの風習や、女子児童の教育と結びついて受容されました。

昭和2年の日米親善人形は、できるだけ3月3日の節供に間に合うように配布の計画が進められました。結果的に多くの小学校では3月3日に間に合いませんでしたが、長野県では月遅れで節供を祝う慣習があったため、4月に行う節供で日米親善人形を飾っていました。日米親善人形は、雛人形と共に親しまれたのです。その後、人形は様々な場所に置かれていましたが、当時は

女子児童のみが受けていた家事・裁縫の授業を行う部屋に飾られていた学校が多かったとされます。答礼人形の費用を女子児童から集金した学校もありました。こうした背景から、日米親善人形は女子児童教育との接点が多かったと見られます。

「青い目の人形」として親しまれた日米親善人形は、それまでの西洋人形に対するイメージや、雛祭りの風習を背景に、日本で受け取られたといえるでしょう。

3 「敵性人形」

全国各地に配られた日米親善人形は、太平洋戦争の戦時下において「敵性人形」とされ、処分が進められてしまいました。アメリカから贈られた人形であったため、敵国の人形として排斥されるようになったのです。

この時の記録は、ほとんど残っていません。人形を処分するよう扇動する新聞記事や、燃やしたことを報じる新聞記事は残っていますが、各学校でそのことを示す史料は、あまり見られません。人形を処分せずに残しておいたことに関する記録については、全くと言ってよいほど残っていません。人形を処分するよう扇動される中で、人形を残しておくことは、公にできることではなかったと考えられます。そのため、記録に残すこともなかったのでしょう。当時の状況については、戦後に語られた当事者の証言に基づくところが大きいのです。

【信濃毎日新聞の日米親善人形にかかわる
主たる記述】

昭和2（1927）年3月4日 朝刊

青い目のお人形さん きのふ懸廳へつく

同年3月13日 朝刊

お禮におひな様を贈る

同年3月28日 朝刊

子供たちの手でお人形の家を建てる

青い目のお友達を迎へた伊那小学生の喜び

同年4月3日 夕刊

坊ちゃんをお客さまに あす雛祭り

青い目をしたお人ぎうさんも仲間入りさせたいワ

昭和18（1943）年2月10日 朝刊

いますぐ一掃すべき敵性臭

（中略）

7 国民学校の親善人形焼却

同年2月25日 朝刊

外國人人形排撃日

人形を全部焼却校内の米英色を一掃した

同年3月12日 夕刊

「青い眼の人形」の始末

いたいけなる児童に人形を焼き殺すといふ様な考へを起させる如き教育は、敵がい心と残虐心を混同しているのであって、（中略）その小乗的、末梢感覺的、非科学的なる、戦力増強上には勿論、皇國國民教育上からも百害無念

新聞を時系列に見ると、昭和2年には人形を歓迎し、雛祭りで飾っていながら、戦時下では人形が「敵性」のものとして、「排撃」されていることがわかります。

多くの人形は「軍部や政府からの指示で

処分された」と言い伝えられていますが、学校には処分を直接指示する公的な文書の類は残っていません⁽²⁾。新聞記事にも、そういった公的な命令が下されたという記述は見られません。新聞記事からは、敵国に対する敵対心を煽ろうとした結果、人形の処分が推し進められたのではないかとする見方もできます。また、新聞には、人形を残虐な方法で始末することを疑問視する意見も載せられています。この意見も、「戦力増強」といった言葉が使われているものではありませんが、児童に人形を処分させることが「非科学的」であるという指摘がされており、本来は戦争にかかわりのないはずの人形を処分することはパフォーマンスにすぎないと考えた人がいたのではないかとということがうかがえます。

4 戦時下で求められた役割

日米親善人形は、贈られた当時は大切にされながら、なぜ戦時下で処分されることが勧められたのでしょうか。様々な理由が考えられますが、ここでは、戦時下で女性や子どもに求められた役割との関係に着目したいと思います。

戦時下において、現在の小学生相当の子どもや女性は戦場に兵士として赴くことはありませんが、兵士を送り出し、「少国民」「良妻賢母」として支えることが求められました。そのため、物資不足を創意工夫で補い、戦場に物資を送るために家庭では代用品を使うことが求められました。代用品には合理性に欠け、実用的ではないものも多くありました。家事を担う女性が使うことが推奨された代

替品が残されています（写真5）。戦意を高揚させるための精神論が説かれ、女子児童も兵士に慰問文を送り、竹槍や薙刀の訓練を行っていました。

そうした役割を意識した行動の象徴として、人形の処分が提案されたと考えられます。戦時下の役割を重視した教育が行われていた学校の中には、日米親善人形を、女子児童の竹槍訓練の的とした学校があったと言われている。

日本における日米親善人形は、雛祭りの風習、女性の育成と結びついてきたものでした。それと同時に、アメリカ製の人形をはじめとした西洋人形の象徴的な存在でもありました。人形が贈られた当時は、子どもの自由教育、人道的教育が盛んで、人形を通じた国際交流が意図されていました。しかし、戦時下で子どもに「少国民」、女性は「良妻賢母」としての役割が求められるようになると、敵国の人形として処置することが望まれたのでしょう。子ども、特に女子児童とかかわりのあった人形であり、当時の敵国だったアメリカから贈られた日米親善人形は、処分の対象となったのです。人形を処分するということは、当時



写真5 戦時中の代替品の陶製アイロン（当館蔵）
実際には非常に使いにくいもので、あまり使われなかったと見られる。新品同様で残る。

の敵国に対峙する姿勢を示すために押し進められたと考えられます。

5 「発見」と戦後平和教育

戦時下で排斥の対象となった日米親善人形は、多くが処分されましたが、一部の人形は隠され、残されました。残された人形は、戦後しばらくはあまり人目に触れることなく残されてきました。あまり注目されていなかった人形が、人々に注目されるようになったのは、昭和48（1973）年にNHKで「人形使節メリー」が放映されたことがきっかけとされています〔梅原 2002〕。NHKの番組放送を機に、全国で人形の「発見」が相次ぎました。それまでも人形は各所に残され、新しく見つめられたわけではなかったものも多くありました。しかし、国際交流のために贈られ、大切にされた人形の多くが戦時下で処分されながら、一部が隠されて残されたというストーリーは非常にセンセーショナルなものでした。こうしたセンセーショナルなストーリーとともに日米親善人形の存在が広がったため、「発見」されたものとして大きく報道されるようになりました。大鹿村では、人形の保存会をつくるなど、特徴的な活動が行われています。

戦後に人形の「発見」が続いた際にはそのセンセーショナルなストーリーが注目されました。ただ、個々の人形についてはわからないことも多かったため、昭和2年から戦中にかけての記憶を持つ当事者の方々からの証言を集め、記録する活動が各地で行われてきました。

その後、シドニー・ルイス・ギューリックの孫にあたるデニー・ギューリック氏が、新しい人形を日本の小学校に贈る活動をされてきました。シドニー・ルイス・ギューリックの曾孫にあたるシャロン・ギューリック氏が日本で外国語教育に携わっていたこともあり、ギューリック家と日本の子どもたちとの交流が行われています。昭和2年の日米親善人形を残してきた学校に、その妹として贈られただけでなく、人形を持たない学校にも新しく人形が贈られました。それは、人形を持たない学校の子どもたちにも、「海のあちらの友だち」との交流をし、平和について考えてほしいという願いがあったためです。現在もこの活動は続いています。

また、総合的な学習の時間の創設によって、特色ある教育活動が求められたことにより、地域の歴史を知るための題材として日米親善人形が使われる事例が見られるようになってきました。日米親善人形は、戦後には平和教育に活用されてきたといえます。

6 戦後 80 年を目前に

ここまで、日米親善人形について見てきましたが、それを踏まえ、改めて寄贈された人形（表紙・写真1）について考えてみましょう。

この人形は、個人の家にありましたが、大河ドラマで渋沢栄一が取り上げられたこともあり、令和4年頃に見直されました。この時点で、昭和2年の日米親善人形交流から96年、戦後78年経っていました。

現在、日米親善人形が贈られた当時や、「敵性人形」とされた当時を知る人は、多くが故人となってしまっています。そのため、当事者の証言に頼る調査は難しくなっていました。この人形についても、どこから来たのか、どういう経緯で残されたのか、詳細はわかっていませんでした。

この人形があったと思われる地域の小学校（現・長野市立塩崎小学校）に、大正15年度の学校日誌が残っています。この日誌の昭和2年⁽³⁾3月15日の欄には、次の記述があります。

一、校長午後出縣北米合衆國世界兒童親善会ヨリ寄贈ノ人形ヲ受領帰校ス

本縣内ニ二百十五個本郡内ニ拾叁個来ル

この記述から、塩崎尋常高等小学校の当時の校長が日米親善人形を受け取り、学校に持ち帰っていたことがわかります。また、大正15年度に、寄贈者の母親は塩崎尋常高等小学校に赴任していたことがわかっています。

一方で、排斥時に塩崎尋常高等小学校の日米親善人形がどうなったかを示す文献史料は見つかっていません。

そのため、状況証拠のみとなってしまう、博物館に寄贈された人形が、昭和2年3月に塩崎尋常高等小学校に贈られたものと断定することはできていません。史料や人々の記憶として語られてきたことをどのように理解し、後世に伝えていくか、それは現在史料を見る私たち次第です。

おわりに

戦後 80 年を目前として、戦前のことを経験として知っている人は非常に少なくなってきました。

当時の事を直接経験していない私たちは、間接的にしか当時のことを知ることができません。ここまでご紹介した日米親善人形にかかわる歴史も、文献史料と、当時

のことを知る人の記憶、証言を基にしています。これから、「青い目の人形」の記憶はどうなっていくのでしょうか。戦前の記憶を語り継ぐとともに、史料を冷静に見ていくことが大切です。戦時下の記憶をどのように捉え、伝えるのか、今一度考える時期にきているのではないのでしょうか。

(樋口 明里)

注

- (1) この呼称は、人種のステレオタイプ化の問題を孕んでおり、望ましい呼称とは言い難い。しかし、「青い目の人形」という呼称はその後広く定着し、当時の情勢を理解する上で重要であるため、ここでは、括弧つきで限定的に使用する。これと同様に、現在は不適切と考えられる表現や言葉が、戦前に使われていることがある。ここでは、配慮をしながら、当時の情勢を知る上で重要と判断される場合には当時の表現をそのまま引用することがある。
- (2) 昭和 18 年 2 月 19 日の毎日新聞には、文部省国民教育局の課長による談話が掲載され、そこでは人形の処分に賛意が示されている。しかし、そこでも賛意を示しただけであり、処分を命じているわけではないとみられる。
- (3) 大正 15 年 12 月 25 日に大正から昭和に改元したことに伴い、大正 15 年度の 3 月は昭和 2 年となった。

参考文献

- ・梅原康嗣 2002 「長野県における日米親善人形——一九二七年の「青い目の人形」——」『長野県立歴史館研究紀要』 8
- ・是澤博昭 2010 『青い目の人形と近代日本——渋沢栄一と L・ギュリックの夢の行方』 世織書房
- ・ベレジコワ・タチアナ 2021 『海を渡った人形使節——国際人形交流から見た近代史——』 大阪大学出版

博物館だより 第129号 発行日2024年3月31日

長野市立博物館

〒381-2212 長野市小島田町1414
TEL:026(284)9011
<https://www.city.nagano.nagano.jp/museum>

戸隠地質化石博物館

〒381-4104 長野市戸隠栃原3400
TEL:026(252)2228

鬼無里ふるさと資料館

〒381-4301 長野市鬼無里1659
TEL:026(256)3270

信州新町美術館・有島生馬記念館・信州新町化石博物館

〒381-2404 長野市信州新町上条88-3
TEL:026(262)3500